

## 野良猫を保護された方・外に出る猫を飼われている方へ

重症熱性血小板減少症候群(SFTS)は、マダニが媒介する人や動物に感染するウイルス感染症です。犬猫への感染は、全国的に増加傾向で、特に猫での発生が急増しています。(図1) マダニが多く生息する姫路～龍野地域でも、毎年のように犬猫の SFTS の発生がみられるようになってきています。人が SFTS に感染した場合、有効な治療法がなく、その致死率は 10～30%に上ります。当院では、2025 年に SFTS を発症した猫を治療した獣医師の死亡事例(ネコ→ヒト感染)が発生したことを受けて、野良猫や外に出る猫の診療の受け入れ体制の見直しを行います。

### 飼い主の皆さまへのお願い

○ 野良猫や外に出る猫の診察をご希望の場合は、直接病院に来院せず、必ず事前にお電話ください。

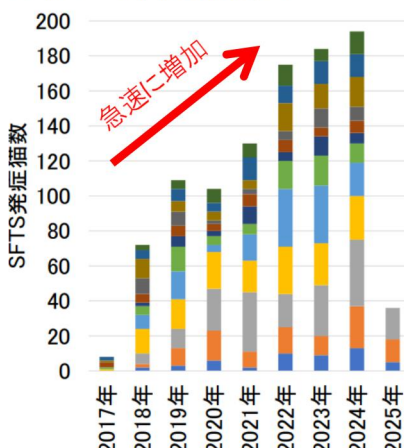
事前のご連絡: ☎ 079-237-1121

- ⇒ 今まで通常通り診察を行っていた猫ちゃんも、外に出る場合は来院前に必ずお電話・申告ください。
- ⇒ 事前連絡なく直接来院された場合、院内の安全確保のため、診察をお断りすることがあります。
- ⇒ 他の飼い主さま、院内の動物たちを感染リスクにさらしてしまうため、診察順は最後(時間外)になります。
- ⇒ 到着後は、駐車場から再度お電話いただき、受付の指示に従い車内でお待ちください。
- ⇒ 院内へは、必ずキャリーケースに入れて入室いただき、指示があるまで猫を出さないでください。
- ⇒ 診察は、ガウン、手袋、ゴーグル等の感染防護具を着用して行います。(図2)  
通常の診察費に加え、感染症対策費(16,500～22,000 円)がかかりますのでご了承ください。
- ⇒ なお、当院には感染症に対する隔離室がありませんので入院治療はできません。

### SFTS 感染からペットを守るために

- 猫は、『完全室内飼育』を推奨します。(完璧な予防策はこれしかありません)
  - ⇒ 猫は、ウイルスに感染しやすく、外に出ることで SFTS 感染リスクが一気に高まります。
  - ⇒ 外に出た猫が体調を崩した場合、診察・検査・感染対策費用など、通常より大きな費用がかかります。
- 犬・猫ともに、『通年のマダニ予防徹底』をお願いします。
  - ⇒ マダニ駆虫剤は、有効性のある動物用医薬品の使用をお願いします。(市販薬は効果が不十分です)
  - ⇒ マダニ駆虫剤の使用で感染確率を低減できても、感染を 100% 予防することはできません。  
犬の散歩等で外に出る場合は、マダニの忌避効果のある虫よけスプレーの併用をおすすめします。
  - ⇒ 犬の散歩の際は、草むら・河川敷などのマダニの生息域に踏み込まないようお願いします。

(図1) SFTS発症ネコ



(図2) 感染防護具



# SFTS(重症熱性血小板減少症候群)について

## — 命を守るために、知っておいていただきたいこと —

### SFTS とは？

重症熱性血小板減少症候群(SFTS)は、マダニを媒介として人や動物に感染するウイルス感染症です。人での発生は、年々増加しており、2025 年は 8 月時点ですでに前年の感染者数を上回っている状況です。また、西日本中心だった発生地域も、東海地方、関東地方、北海道など全国に広がってきています。人が SFTS ウイルスに感染した場合、現時点で有効なワクチンや治療薬がなく、その致死率は 10~30%と高くなっており、非常に危険な感染症です。

動物での発生は、2025 年 3 月時点で、猫 1,013 頭、犬 64 頭認められ、特に猫で急速に増加しています。また、猫犬が SFTS に感染した場合の致死率は、猫 60%、犬 40%と高く、特に猫は重症化しやすく発症後数日で死亡することが多くなっています。

### SFTS を「診察時にすぐ見抜くこと」は困難です

感染動物は、以下の症状を呈しますが、これらの症状は他の感染症や一般的な病気と似た症状であること、感染初期にはこうした症状がはっきり現れないことなどから、症状だけを見て SFTS かどうかを即座に見抜くことは非常に困難です。

(症状) 熱、元気がない、食欲がない、嘔吐、下痢などの消化器症状、黄疸、白血球や血小板の減少

当院では、次のようなケースで猫を診察する場合、SFTS 感染の可能性を常に念頭に置いて、感染防護具を着用したうえで慎重に診察を行います。

野良猫を保護して体調が悪そう、野良猫を保護して 2 週間経過していない、外に出る飼い猫の元気食欲がない、脱走後から体調が悪い、ダニが寄生している、定期的に外に出る飼い猫、脱走した疑いがある

### 犬・猫の発症リスクと人への感染

SFTS ウイルスは、マダニを介して感染するため、外に出る犬猫、野良猫に感染のリスクが大きい病気です。2025 年には、1 歳のメス猫(完全室内飼育・ダニ予防済み)が、屋外に脱走したあと、耳に小さなダニを多数付着して帰宅し、動物病院で除去したが、約 10 日後に SFTS を発症し死亡する事例が発生しました。

人への感染は、草むらなどで直接マダニに刺される以外にも、SFTS に感染した犬猫の体液(唾液・血液・便・尿)に直接触れることで感染する可能性があります。

例えば、「衰弱した野良猫を保護する際に噛まれた女性の SFTS 感染による死亡事例」や「SFTS ウイルスに感染した猫を診察した獣医師の死亡事例」も報告されました。これ以外にも、発症猫から飼い主や獣医療従事者への「ネコ→ヒト感染」が相次いで発生している状況です。

(注意) SFTS 感染動物は、治癒した後も 1 ヶ月程度体外にウイルスを排泄し続けますので、ご家族が感染しないよう、手袋・マスク・消毒など細心の注意を払い飼育する必要があります。

